



Global Studies Initiative
The University of Tokyo

グローバル・スタディーズ・セミナー
海外派兵の地域横断的な比較研究

第4回

「2010年代のイギリスの介入と不介入： リビアとシリアをめぐる大国の責任、 地域の力学」

小松 志朗（山梨大学准教授）

日時・会場

2020年10月 8 日（木） 16:00-18:00

Zoom Webinar(下記URLからご登録ください。)

<https://bit.ly/35ywMBT>

要旨

2010年代に中東の「アラブの春」をきっかけに始まったリビアとシリアの内戦に対して、イギリスは前者に素早く介入する一方、後者への介入は長らく躊躇し続けた。イギリスといえば、1990年代の終わりからリベラルな価値観にもとづく人道的介入の旗振り役だった。その国が介入と不介入の間で揺れ動くようになったことは、何を意味するのか。本報告では、リビアとシリアの事例を中心にイギリスの介入政策を分析するとともに、介入研究の新たな理論的視点を探っていく。キーワードは「大国」と「地域」である。

さらに、補足的な考察として、2014年のエボラ出血熱の流行時にイギリスがアフリカの感染国に軍隊を派遣した事例も取りあげたい。内戦と感染症は異なるタイプの問題だが、「海外派兵」の観点からまとめて見ると、現代の国際政治の重要な側面が浮かび上がってくるのである。

使用言語 日本語

主催 東京大学グローバル地域研究機構 (IAGS)